

諸外国におけるスヌーズレン研究の現状と課題

柳 本 雄 次

Current Issues in Studies on “Snoezelen” in Foreign Countries

Yuji YANAGIMOTO

2015年11月20日受理

抄 録

欧米・アジア等諸外国におけるスヌーズレン研究は、重度知的・重複障害者を主たる対象に、情動の変化、問題行動の改善、幸福感向上及びスタッフとの相互作用について、応用行動分析や生理学的測定を用いた事例研究が多く実施されていた。しかし、この分野における科学的な研究がほとんど蓄積されていないため、スヌーズレンの有効な治療・教育アプローチとしての確証が得られていない。諸外国のスヌーズレン研究の現状を踏まえてスヌーズレン研究の今後の課題を提言した。

キーワード：スヌーズレン，多重感覚環境，重度知的・重複障害児，レジャー・教育・治療，効果研究

1 問題の所在と目的

スヌーズレン（Snoezelen）と聞くと、あの仄暗く、バブルユニット、ボールプール、ウォーターベッドやサイドグローといった特有の器材があるスヌーズレン・ルームと呼ばれる特別な部屋及びそこでの活動といったイメージを思い浮かべる人が多いであろう。しかし、スヌーズレンには、特に厳密な内容及び方法を規定した理論的基盤らしきものはなく、ただ、利用者のニーズに応じて、視覚、聴覚、触覚、嗅覚、味覚などを適度に刺激する、コントロールされた多重感覚環境と、利用者及び支援者（介護士・治療士・教師等）の三者間の相互作用により、利用者と支援者の相互の共感と生活の質（幸福感）の向上の産出をねらいとするものであるという理念だけが明確に述べられているに過ぎない。

スヌーズレンは、1970年代後半にオランダの重度知的障害者福祉施設で2人の職員（Jan Hulsegge and Ad Verheul）が障害者の生活の充実を求めてテントにさまざまな感覚刺激を提供する器材を製作・設置した取り組みから創始された。スヌーズ



(写真1 バブルユニット)



(写真2 ボールプール)

レンという用語は、スヌッフェレン (snuffelen; ウトウトする) とドゥズレン (doezelen; クンクン匂いを嗅ぐ) という2つのオランダ語を接合した造語である。スヌーズレンの理念は、この「リラクゼーション」と「探索」という静態的・力動的側面を包含する環境を創設することで、利用者が心地よい気分の中で潜在的な能力を発達させることを支援することにあるといえる。

1990年代以降、欧米やアジア諸国では、スヌーズレンは、重度知的障害・重複障害児(者)を対象にして、レジャー(レクリエーション)から発展して、教育・治療へと実践が驚くほど拡充している。この利用目的の多様性に応じて、研究もきわめて多様化している。スヌーズレンは経験的には総じて利用者の情動・行動面にポジティブな影響を及ぼすことが論ぜられているが、厳密な研究はほとんど蓄積されていないため、スヌーズレンの教育・治療アプローチとしての有効性については確証されていない(Lotan et al.,2009:213)。

日本には1990年代にスヌーズレンが島田療育園(現島田療育センター)の鈴木清子により紹介され、重症心身障害児施設、療育施設や特別支援学校等にスヌーズレン・ルームの設置が進んだ。この紹介の経緯から、スヌーズレンの実践は重症心身障害児施設(病棟)でのレジャー(リラクゼーション)としての利用に限られた。他方、養護学校(現特別支援学校)においてスヌーズレンは、感覚の活性化を図る目的で重度・重複障害児の自立活動に導入され、実践が試みられたものの、研究としては実践報告のレベルにほとんどとどまっている。その教育実践では、障害児の意識や注意を刺激に集中させる、注視や追視を促す、身体の運動・動作を引き出す、リラクセスを導く、興味・関心を拡大する、刺激を楽しみ発声や笑顔を引き出す、反応が活発化する、などの指導目標と結果が記述されているが、重度の障害児の反応がきわめて微弱なため、教師による行動評価が困難な場合も多く、科学的な実証性や客観性に関して難点があるとされる(姉崎,2013:372-373)。わが国のスヌーズレン研究は、その実践がレジャー(リラクゼーション)として導入、拡大されたことから進展せず、外国のそれと比べて質・量ともにきわめて限られているといえよう。

そこで、本稿は、欧米、アジア等諸外国におけるスヌーズレンに関する学術的レベルの研究について、関係文献に基づきその現状と課題を分析し、今後のスヌーズレン研究のあり方を提言することを目的とした。^{註1)}

2 方法

関係文献の収集・選定については、データベース Ovid, ERIC 他を使用し、Snoeselen, multisensory environment、disability 等をキーワードに用いて、ここ 20 年間の学術誌掲載論文を検索した。このうち、本稿では、Hogg et al. (2001)、Lotan et al. (2009) , Lancioni et al. (2002) のレビュー論文を中心に、スヌーズレン研究の現状と課題を分析・検討した。さらに、スヌーズレンに関係するセミナーや自主シンポジウムにおける講義・協議内容を踏まえて今後の研究課題について考察を行った。

3 スヌーズレン研究の状況

1) 研究の遅滞した背景

スヌーズレンの実践が急速に進展したのに比して、研究活動が遅滞した背景には以下の事情が考えられる。

スヌーズレンの基本理念として、重度の知的・重複障害者が自分で選択し、自分のペースで、自分の時間を過ごし、楽しむことを保障し、それを通して生活をより豊かにすることを目指すことが標榜されてきた。その原点には、何かを達成するための手段ではなく、活動そのものが目的であるとされた。「利用者が自由に行動し、たどり着いたところがゴールということで、さまざまな可能性が開かれる、共生・共楽のための理念であり、実践である」という創始者の一人 Ad Verheul のゼロスタートとオープンゴールの構想がある^{註2)}。そしてスヌーズレンは「指導者により予め決定された教育や治療のねらいを欠くものであるべき、すなわち非指示的であるべき」(Hogg,et al.,2001:354) ことが主張され、他の推進者からも同調された。この見解は、障害の軽減や行動の改善などの目的や目標を設定して行われる治療や教育とは異なり、リラクゼーション、楽しみ及び対人関係の促進を強調するもので、レジャーはいまや自己発達や自己実現のために治療や教育に劣らぬ独自の可能性を有すると解される。それゆえ、現在の治療・教育のもつ“効果重視”の価値観に迎合することには、スヌーズレンの価値が失せてしまうという危惧を抱き、ここからは実践報告は推奨されるが、エビデンスに基づき効果を客観化しようとする研究志向には忌避的構えが存すると考えられる (Lancioni,et al.2002:176)。

しかしながら、創始者が全面的に治療・教育を排斥したわけではなく、スヌーズレンは重度知的障害者の発達、感覚の活性化、治療にも活用できるという。スヌーズレン・ルームの器材とその雰囲気には感覚を活性化する効果があり、利用者は自発的な反応を喚起し、環境を探索するような能動的な行動や新たな活動へと触発される。また、利用者はルームでは、日常生活場面と比べて、自傷行動や破壊行動等の問題行動に陥ることなく、まったく異なる行動を示す。しかし、専ら治療・教育への利用となると、

その目標を達成するためのプログラムが必要となり、その作成・実施には指導者が大きく関わり、セッション内容も事前に決定される。例えば、感覚の発達を目的としたプログラムであれば、その目標を達成するためにどのような刺激を提供すべきか、どの感覚に焦点を合わせるべきかなどが指導者により検討され、選択・組織化される。それは、利用者は自分がしたい活動を自分で決めるという理念に反することになり、「その教育や治療をスヌーズレンの中心的な機能にしたいわけではない」(フルセッヘ・フェアフル著・姉崎監訳,2015:164)と論じられる。

2) Hogg et al. による研究論評

Hogg et al. (2001) は、選定した 19 件の研究を対象に Robinson (1993) の枠組みを援用してデザインの諸側面から、対象 (利用者)、感覚の提示条件、従属変数の設定、研究デザイン、知見、結果の般化・維持、介護者のニーズと認識の観点に基づき論評を行っている。その結果、対象は中度から最重度の知的障害者で、年齢は児童から成人まで幅があり、自閉症等他の障害を併有するなど広範であること、研究の多くが行動面、特に情動の変化、挑戦的行動、リラクゼーション及び他者や機材との相互作用について扱っていること、典型的な研究は多くが応用行動分析アプローチを適用したもので、生理学的測定を用いた研究は少数であることを指摘した。

研究デザインは専門的適切性の面で著しい差異がみられた。例えばスヌーズレン条件と非スヌーズレン条件とを比較して、スヌーズレン条件で常同的行動などの不適応行動の減退、注意集中や課題遂行の向上などポジティブな知見を提示する研究は、どちらかというデザインに厳密さを欠き、他方、良好なデザインの研究の中にポジティブとネガティブな知見の両者を報告する特徴を示唆する。また、研究の多くは、スヌーズレンセッション直後の般化を認めているが、時間を経過した日常生活場面への般化や維持になると研究者も疑問を感じるの可言及していない。この般化・維持に関するネガティブな知見はスヌーズレンの価値を決して否定するものではなく、指導者にスヌーズレンとより広い環境との接合に注意を向ける必要があることを論じた。さらに、人工的な多重感覚環境と自然な世界の経験との架橋の問題について、教育者はそうしたリンクを達成する方法を創出する近い立場にいるが、この重要な問題に取り組んだ研究の情報ほとんどないと批判している (Hogg et al.,2001:369)。

今後の研究課題に関しては、次の 3 点を挙げている。①研究課題を明確に設定し、評価モデルを確立すること、②対象の人数 (事例) を増やすこととサンプルとして無作為の選定を考慮すること、③研究デザインの構想は科学的な適正基準を充足するパラダイムで実施すべきことである。

3) Lotan et al. による研究論評

Lotan et al. (2009) は、知的障害者を対象に個別のスヌーズレン介入の有効性について取り上げた 13 件の研究を選定した。それぞれの研究が、研究デザイン、介入条件、参加者の (年齢を含む) 個人差従属変数 (例えば適応的・不適応的行動) 測定

の面ですべて異なることから本論評では研究アプローチとしてメタ分析が採用された。その結果、事前・事後における適応的・不適応的行動の出現頻度を測定する研究が圧倒的に多く、対象（被験者）数は2～54名（平均で9名）であり、年齢は5～65歳（平均33歳）であった。介入は20～40分（平均30分）のセッションを週1～5回（平均2回）実施し、総数は2～50回（平均20回）とかなり幅があった。スヌーズレン期の行動を、ベースライン期の行動、積極的な治療介入期の行動、非積極的な介入期の行動と比較したところ、研究間で中くらいから実質的な異質性が認められ（ $I^2 = 42\% \sim 91\%$ ）、研究の異質性と対象の少数性のために統計的な有意差まで至らなかった。しかし、事前・事後の比較とスヌーズレン外での行動の般化に関するメタ分析では、7研究の間に異質性は何ら見出されなかった。効果の大きさは大きく（ $ES = 0.76$ ）、高い有意差を示した（ $p < .001$ ）。すなわち、スヌーズレンを受けた対象者が介入前に比べてより適応的行動を発達させたことを示した。般化された行動への効果は一貫的で（ $I^2 = 0\%$ ）高く、有意な効果の大きさがあった（ $ES=0.84$ 、 $p < .001$ ）。適応的行動への効果はより大きな傾向があり（ $ES = 1.69$ ）、またより異質的であった（ $I^2 = 96\%$ ）。不適応的行動への効果は大きく（ $ES=1.13$ ）、有意で（ $p < .001$ ）、比較的一貫していた（ $I^2 = 25\%$ ）。ベースライン期と日常場面間でポジティブな行動変化（とりわけ不適応行動の軽減）が認められ、それはスヌーズレンの治療的效果に対して予備的支持を与えることを示唆している（Lotan et al.,2009:214）。

今後の課題としては、①対象サンプル規模の拡大、②研究方法の記述の明確化、③対象範囲の拡大（高齢認知症者、痛みのある慢性患者等）を指摘している。

4) Lancioni et al. の研究論評

Lancioni et al. (2002) は、21件の研究（認知症者の7件を含む）を選定し、①研究の全容、②具体的な方法論、③利用可能性、④研究課題について検討を行っている。そのうち、スヌーズレンセッションとベースライン期あるいは他の場面における社会的・情緒的尺度、課題遂行、適応的・不適応的行動出現の比較では、14件がセッション中に、4件がセッション後に、2件がより長期（般化）にスヌーズレンのポジティブな効果をそれぞれ報告していた。研究には全般的にポジティブな結果が大勢を占めたが、それにはセッション後の評定、回顧的な記録、職員の面接など質的・非構造的なデータに拠るものが含まれ、根拠の確証程度は予備的で限定的と論評された（Lancioni et al.,2002:180）。

これらの結果を、①研究の方法論的側面（弱点）、②スヌーズレンプログラムを開設する経費とプログラムで利用する刺激の範囲を減少させる可能性、そして③知的障害者と認知症者を対象とする介入プログラムの理解と有効性を高めるための研究の問題点と関係させて討論している。

今後の研究課題には①スヌーズレンの効果について方法論的欠陥を是正し根拠を明確にすること、②他の活動やリクリエーション、リハビリテーションと同一の条件下で比較研究を行うこと、③研究期間を拡大し、単一被験者研究法により般化・維持を

解明することを挙げている。

5) スヌーズレン研究の個別的問題

(1) 対象（利用者）の問題

各研究で対象（利用者）数には差異がみられたが、いずれも少人数であった。このため量的研究として統計的に有意差を検定する規模ではなかった。そのことで対象数の拡大が課題として指摘された。また、対象の属性について統制が難しく、障害の状態や年齢等にも幅があった。さらに、対象の選定についても、当該施設の入所者を対象としてすでに治療プログラムを利用をする対象者であるため、治療アプローチの比較研究であっても、無作為抽出による選定等の手続きを取ることが難しい事情があった。このことからそれぞれの治療法結果の適正な比較検討が臨床の場では困難となっている。それには、単一被験者研究法を採用して、対象人数を増やしていく手法が考えられるが、研究期間が長期にわたるなど別の問題が派生する。

また、対象者間でスヌーズレンの効果には個人差があることが指摘されている。スヌーズレンは同じ特性を持った個人であっても、すべての者に万能薬ではない。他の多くの介入法と同様に、個々人のパーソナリティや感受性に関して、スヌーズレンを有効とさせたり、時には有害とさせたりする何かを解明する努力が行われなければならない。スヌーズレン・ルームの多重感覚環境に置くことが絶対的に適切だと仮定するよりも、いかにその環境を個人に適合させるかに留意することが求められる（Hogg et al.,2001:368-9）。

(2) 効果の般化・維持の問題

すべての研究が、スヌーズレンによる効果を他の環境、そのほとんどが施設の日常生活場面と比較して考察している。スヌーズレンセッションの感覚体験が他の場面へ般化するポジティブな効果は、ときにネガティブな傾向を示す結果もあり、あってもごく短期間のみ有効であったりする。これについては2つの理由が示唆されている。一つは、多重感覚環境の経験が中枢神経系や自律神経系に作用するならば、その影響は特定場面に限定されること、もう一つは、学習されたスキルの般化が生起するには一定の条件が必要なことである。後者については、応用行動分析の研究者は、介入の般化をただ望むのではなく、そのための積極的なプログラム化を主張している（（Hogg et al.,2001:369））。般化なくして、維持は問題にもならない。実践者は、時間限定の影響を超えてスヌーズレンとより広い環境とのリンクに注意をもっと向ける必要がある。現実的な行動の変化を企図するにあたっては、スヌーズレン環境の体系的なプログラム化が、より広範な場面にまで拡大されなければならない。この問題と関連して、前述した人工的な多重感覚環境と自然な世界の経験との架橋が課題となる。

(3) 指導者と利用者との相互作用の問題

スヌーズレンの価値、その有効性を説明する核心に利用者や指導者と間で展開される社会的・情緒的相互作用を措定する研究者もいる。5名の指導者の日常生活場面（食事時）とスヌーズレン場面での相互作用の行動を観察した Germanau（1998）の研

究では、前者では言語的コミュニケーションが優位で、後者では身体的接触を含む非言語コミュニケーションが多いことが報告されている。スヌーズレンは、日常生活場面よりも行動が共感的となり、情緒的交換を促進できる場面であると考察された(Hogg et al.,2001:367)。こうした研究はスヌーズレン場面で起きている現象を解明するばかりでなく、スタッフと知的障害児(者)との間に形成される対人関係の質や、それが彼らのより広範な生活でどのように高められるかについて解明する可能性を持っている。相互作用について、スタッフを対象にした半構造化面接等による質的研究法を実施する必要性も示唆されよう。

4 今後のスヌーズレン研究の課題

スヌーズレン研究は、厳密な学術水準としては方法論的に、前述したように、対象の選定、条件設定、信頼性、統計処理等で問題性が指摘され、幾多の課題を抱えている。

今後のスヌーズレンにおける学術的研究に関して、現実的制約を度外視して、幾つかの課題を挙げるとすると、何よりも科学的研究の基本的要件を充足すること(Evidence = 客観性・再現性の追求)が望まれる。介入の比較研究には、対象の無作為のグルーピングの手続きを行い、一定期間後の測定評価による結果を、量的研究であれば統計的処理を行うことが必要とされる。質的研究であれば当事者の回顧的な記述を基礎データとすることは避け、独立した研究者との共同研究体制を確保することが求められる。

今後の研究は、介入条件に関しては明確に、例えば個別対グループ、介入の頻度と期間、スヌーズレン・ルームのタイプ、ルームや器材の種類、専門家の適用した具体的な操作技法を、また対象の属性については、その年齢、性別、知的障害の程度や障害の状態を統制できる程度の人数規模を確保すること、背景的条件については、リハビリテーション施設か教育施設か、入所型か通所型か、利用ケア等すべての側面を明確に記述しなくてはならない。(Lotan et al. 2009:214)

特に効果研究に関しては、研究の目的として何を設定したか、例えば①情動の変化(安心感、快適な気分、意欲の喚起)、②問題行動の低減(自傷行動、常同行動等の減退)、③適応行動の発現(探索行動、課題遂行の増加)、④緊張の解消(脳性まひの過緊張の弛緩、ストレスの消滅)、⑤自己決定の促進(自発行動、選択行動の増加)を明記し、それに合わせた適切な研究方法を選択する必要がある。

スヌーズレン研究の基本的構えとして、スヌーズレンをレジャー(リラクゼーション)だけでなく、治療や教育と捉えることを基本としつつ、創始者の構想を尊重して、あまり効果重視の価値観に偏することのない実践及び研究を推進することの大切さを銘記すべきであろう。

(註1) 全日本スヌーズレン研究会は、2008年に当時国際スヌーズレン協会(ISNA)の代表をしていた Krista Mertens から要請を受けて、姉崎弘を中心に2012年1月

に ISNA 日本支部・全日本スノーズレン研究会として設立された。本研究会は、世界的な視野に立ち、教育・医療・保健・福祉・介護等の分野におけるスノーズレンについて総合的な研究及び実践を推進し、わが国におけるスノーズレンの普及を図り、専門家の育成を目指す。また、国内外のスノーズレンに関する研究の知見や実践の報告等の情報を入手するとともに、わが国におけるスノーズレン研究を早急にかつ確実に進めていくため、機関誌の発行、研修会等の開催を行う。なお、本研究会事務局は常葉大学教育学部内に置かれている。

(注2) 日本スノーズレン協会第22回スノーズレンセミナー(2015.5.24)における鈴木清子の講義資料による。

文献

- 姉崎弘(2013) 我が国におけるスノーズレン教育の導入の意義と展開, 特殊教育学研究, 51(4), 369-379.
- Ashby Broxholme, Pitcaithly & Lindsay (1995) Snoezelen: its effects on concentration and responsiveness in people with profound multiple handicaps, British Journal of Occupational Therapy, 58, 303-307.
- Hogg, J., Cavet, J., Lambe, L. and Smeddle, M. (2001) The use of 'Snoezelen' as multisensory stimulation with people with intellectual disabilities: a review of the research, Research in Developmental Disabilities, 22, 353-372.
- フルセツヘ / フェアフル (1987) Snoezelen, another world、姉崎弘監訳 (2015) 重度知的障がい者の心地よい時間と空間を創るスノーズレンの世界, 福村出版
- Kaplan, H., Clopton, M., Kaplan, M., Messbauer, L. & McPherson, K. (2006) Snoezelen multi-sensory environments: Task engagement and generalization. Research in Developmental Disabilities, 27, 445-455
- Lancioni, G.E., Cuvio, A.J. & M.F.O' Reilly (2002) Snoezelen: an overview of research with people with developmental disabilities and dementia, Disability and Rehabilitation, 24, 175-184.
- Lotan, M. & Gold, C. (2009) Meta-analysis of the effectiveness of individual intervention in the controlled multisensory environment (Snoezelen[R]) for individuals with intellectual disability, Journal of Intellectual and Developmental Disability. 34(3), 207-215.
- Matson, J.L., Bamburg, J.W. & Smalls, Y. (2004) An analysis of Snoezelen equipment to reinforce persons with severe or profound mental retardation. Research in Developmental Disabilities, 25, 89-95.
- Shapiro, M., Parush, S., Green, M. & Roth, D. (1997) The efficacy of the 'Snoezelen' in the management of children with mental retardation who exhibit maladaptive behaviours. British Journal of Developmental Disabilities, 43, 140-155.